

古典学習とデジタル教科書

デジタル教科書は、その使い方によって、古典の学習をさまざまに支えてくれる強力なツールにもなります。今回は、古典に親しむための活用のしかたをご紹介します。

1 古典の学習とICTは相性がよい？

意外に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、古典（伝統的な言語文化）の学習とデジタル教科書をはじめとしたICTはとても相性がよいと、私は思っています。

まず、文章、画像、動画など、古典に関連する参考資料は、今、インターネットを使えば簡単に、大量に手に入れることができます。しかも古典の原文なら著作権の心配はなし！安心して資料を使うことができます。

もう一つは、多彩な学習活動に対応することができるといえます。古典の授業を「音読して↓説明して↓終わり」とするわけにはいかないですね。生徒が

さまざまな学習活動を通して「古典に触れ、親しむ」ことができるようにするのが、中学校段階で求められる古典の学習です。とはいえ、生徒にとって、古典の世界は予備知識も少なく、身近でもない。親しめるようになるためには、いくつかのハードルがあることも事実です。そこで、古典に対する抵抗感を払拭するためのさまざまな学習活動が、これまでに開発されてきました。

古典に親しむための学習活動の例

- ① 身体で味わう
音読・朗読・暗唱
群読・劇化
- ② 書き換える
「現代版○○」
なりきりインタビュー
日記・新聞・ニュース番組

2 デジタル教科書で古典の学習がどう変わる？

① ゲーム感覚で楽しく暗唱

古典の学習で私が大切にしているのは音読・暗唱です。教科書に掲載されている作品の冒頭くらいは、暗唱するくらい体にしみこませて卒業させたいものです。しかし、ただ「覚えよう」と指示するだけでは、活動が単調になり、生徒の興味を十分引きつけることは難しいと考えています。

そこで、私はデジタル教科書に収録されている「暗唱してみよう」というワークを使ってみました。これは、本文の一部分をマスキングすることができる、暗唱支援ツールといえます。暗唱のレベルが六段階に分かれていて、マスキングする部分を増やしたり減らしたりすることができますという仕掛けになっています。このワークを取り入れることで、ちょっとしたゲーム感覚で、何度も繰り返し暗唱にチャレンジをすることができ、歴史的画面への書き込みもできるので、歴史的仮名遣いや係り結びなど、注意すべき語句を示すこともできます。

古典学習を支援するICT活用の例

- ・ 関連資料（映像・文章）を見る。
- ・ インターネットで情報を集める。
- ・ 音読・朗読の音声を聴く。
- ・ 音読・朗読しているところを撮る。
- ・ 写真、動画などと古典作品を組み合わせて発信・交流する。
- ・ フラッシュカード、クイズ、かるたなどのゲームで遊ぶ。

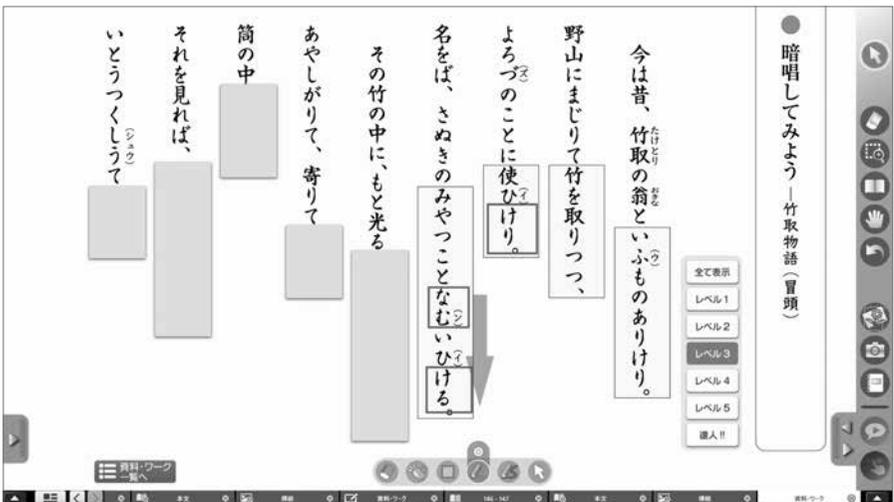
他にもまだまだありますが、これらをよく組み合わせて学習活動を作り上げていけば、生徒にとって、楽しく古典に親しむ授業になると思います。

- 続き話、歌物語
現代語訳
- ③ 古典の世界を知る
時代背景などを調べる
さまざまな現代語訳を読む
解説書、注釈を読む
他の章段、場面を読む
当時の生活を体験する
- ④ 遊ぶ
ことわざ、百人一首などのかるた
パロディーづくり
など



千葉県生まれ。千葉大学大学院修了。千葉県の公立中学校教諭、千葉大学教育学部附属中学校教諭を経て、現職。共著書に『中学生を作文好きにする！新レシビ60&ワークシート』（明治図書出版）など。

以前、ある中学校で拝見した「扇的」の授業が忘れられません。先生はこの『平家物語』の世界を生徒に味わわせるために、ある工夫をしました。「十二束三伏」のかぶら矢を用意して（もちろん複製ですが）、廊下の奥へ四十間あまり（約



◀「蓬萊の玉の枝——『竹取物語』から」（1年）のワーク「暗唱してみよう」に書き込みを入れた画面。

② 「原文と現代語訳」 ツールで音読練習

もう一つ、音読練習に便利なのが「原文と現代語訳」というツールです。これは、右に原文、左にその現代語訳が並べて表示され、原文に添えられたスピーカーマークを押すことで、その部分の朗読音声聞くことができる、というものです。現代語訳は、初期画面では全てマスキングされており、マスキング部分や「全て表示」ボタンを押すことで、そのマスキングを外すこともできます（右下図）。

このツールは、指導者用デジタル教科書上で、教室全体で示すように使ってもよいのですが、やはり一人一台環境で学習者用デジタル教科書が使える状態だと、より効果的な活用が期待できます。生徒はそれぞれに音読練習をしながら現代語訳を参照します。音読でつかえたところや読み方がわからないところは、スピーカーボタンを押してその部分の読み方を確認します。特に引つかかるところやチェックしておきたいところは、スタンブで印を付けた書き込みを入れたりして後で確認できるようにしておきます。これを何度も繰り返す中で、音読に習熟し、言葉の意味も自然に理解できるよう

になっていきます。

このように、一人一台という環境を整えば、より個に応じた学習ができるというのもデジタル教科書の優れた点だと思います。

③ 課題をもった動画視聴で 作品世界をイメージ

私が古典の授業で難しさを感じているのが、その作品世界のイメージをどうやってつかませるかということです。ここで、デジタル教科書に収録されている多様な資料が役に立ちます。

例えば「枕草子」(二年)には、「春はあけぼの」の朗読とともにイメージ画像が流れる映像資料が収められています(左下図)。これを見れば、言葉の意味が多少わからなくても、情景をつかむことができます。「まいて雁などのつらねたるが」といっても、地域によっては雁の姿を見たこともない生徒がほとんどだったりするので、こうした映像はとても助かります。

また、「蓬萊の玉の枝——『竹取物語』から」(二年)ではこんな学習をしました。デジタル教科書には、「かぐや姫と五人の貴公子」という映像資料が収録されて

基礎知識を学ぶことができます。短時間で取り組めるので、学習の合間のちょっとした息抜きにもなります。

3 古典の多彩な学習活動を 支えるデジタル教科書

今回は、古典教材に関連したデジタル教科書のさまざまな活用のしかたをご紹介します。多様な資料やツールが収録されているので、何を使えばよいか迷ってしまいうのですが、どのようなねらいの下で、どんな学習活動の中にこれらを位置づけるかが授業づくりの腕の見せ所だと思います。

「古典を読む」「古典の世界を知る」「古典を自分の考えや生活に生かす」など、古典の学習にはさまざまな切り口があります。生徒の実態に合わせて、古典を楽しく学ぶことができるようにアレンジしていきたいですね。

まずはデジタル教科書を自分でも触ってみて、教師自身がデジタル教科書を楽しんでみてはいかがでしょうか。

「扇的——『平家物語』から」(二年)であれば、琵琶奏者による弾き語りの映像(右下図)はぜひとも見せたいものです。『平家物語』がどんな人たちによって受け継がれてきたのか、その姿を琵琶の響きとともに味わうことができます。この映像もおすすめてです。

④ 意外に便利！ フラッシュカード

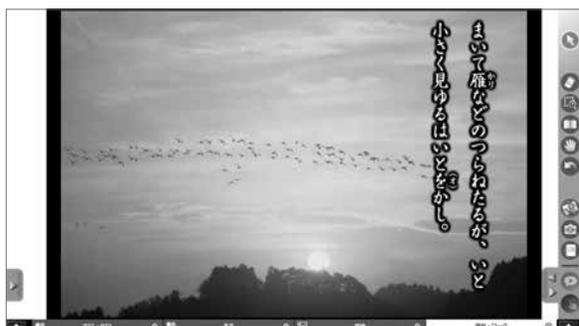
最後に、これも便利だなと思っているのが「古典のフラッシュカード」です(左下図)。全学年・全教材共通で使うことができ、毎時間、これに取り組むことで、歴史的仮名遣いや古語、百人一首などの



▲古典のフラッシュカード「歴史的仮名遣い」



▲「扇的——『平家物語』から」(2年)の資料「琵琶奏者による弾き語り」扇的」



▲「枕草子」(2年)の資料「『枕草子』—四季を味わう」



▲「蓬萊の玉の枝——『竹取物語』から」(1年)の「原文と現代語訳」の画面。